

## 警告・奨励・頌栄

【聖書箇所】 16 章 17～27 節

### はじめに

●ローマ人への手紙の講解説教は、昨年9月から始めて約11ヶ月、今回で一応終わることになります。まことにつたない講解説教でしたが、主に守られ、導かれて、私自身、このローマ書を通して新たに教えられたことが多々ありました。特に、キリストの霊、つまり御霊の原理によってのみ、罪と死の法則に打ち勝つことができること、御霊との親しい交わりの大切さを教えられました。また私たちがキリストの尊い代価によって神に買い取られた存在であること。それゆえ自覚的にはっきりとキリストのものとなり切るべく決心すること。そして私たちのからだを神に献げること(献身)、このことが真の礼拝であること。また信仰の強い人は弱い人をさばかずに受け入れるべきことなどです。

●さてパウロは、この長い手紙を閉じるに当たって、最後に警告と奨励、そして、神をたたえ賛美しています。

### 1. 分裂とつまずきを引き起こす者たちを警戒せよ

●17節でパウロは「兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人々を警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。」と警告しています。一見、思い掛けない、唐突な言葉です。ローマ教会は非常に恵まれた教会でした。前回の16章前半で、ローマ教会にはパウロの知っている人々の中に、すばらしい器たちが多くいることを知りました。19節を読むと分かるように、ローマのキリスト者たちの神に対する従順はすべての人に(他の国の教会にも)よく知られていました。しかしパウロは、サタンの攻撃は恵まれている教会に対して特別強く働くものであるということをよく知っていました。主のみこころが大切にされ、そこに堅く立とうとするときに、サタンはいつでも攻撃をしかけてくるのです。これまでも、パウロが建てた教会を脅し、惑わし、かき乱した連中がいたことをここで思い出したのかもしれませんが、目下のところ、ローマの教会はまだこうした敵に脅かされてはおりませんでした。いつその敵が襲ってこないとも限りません。そのような深刻な危険があることをパウロは告げて、手遅れにならないように警告したものだと思われます。

●この手紙が書かれる前に、パウロはアジアの中心地であったエペソで、三年余りの間、手塩にかけた教会を後にするに当たって、教会の長老たちを自分のもとに呼んで訣別説教しました(使徒20章)。エペソといえば、当時アジア全体の偶像礼拝の拠点となっていたところでした。そこにはわずか12人の弟子しかいませんでしたが、パウロがそこを訪れたとき、聖霊のバプテスマを受け、異言を語り、預言するようになりました。そして霊の戦いを始めたのです。その結果、エペソの町はキリストのもとに奪回され、アジアの中で最も有力な教会となったのです。パウロはその訣別説教の中で次のように警告しています。

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 20 章 29～31 節

- 29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。
- 30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。
- 31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。

●教会が分裂したり、教会がかき乱されたりということをよく耳にします。しかもそうした教会は祝福され、恵まれている教会が多いのです。そうでない教会をあえてサタンは攻撃する必要はありません。なぜなら、すでに霊的に死んでいるからです。イエシュアは山上の説教の中でこうっておられます。「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやってくるが、貪欲な狼です。」(マタイ 7:15)

●「にせ預言者たち」とはどういう外観をしているのかと言えば、「彼らは羊のなりをしてやってくる」ということです。つまり、一見しただけでは決して分からないということです。見分けることの困難さがあるのです。パウロも「驚くにはおよばない。サタンさえ光の御使いに変装する。」(Ⅱコリント 11:1)と述べています。それではどうやってそれを見抜くのでしょうか。イエシュアは「実によって彼らを見分けることができる」と言っています。「実」とは何でしょうか。多くの人は、行ないのことだと考えます。しかし考えてみましょう。キリスト教の異端とされている人たちの行いは、特別おかしなものではありません。むしろ真面目な人が多いのです。熱心です。実践力があります。ですから、もし、私たちが実を行ないのことだと考えているなら、彼らを見抜くことはできません。本物と偽物を見抜く判定は、行いではなく、「教え」にあります。ローマ書 16 章 17 節には「あなたがたの学んだ教えにそむいて」とあります。



●にせ預言者、にせ教師の真偽は、その教えによって識別されなければなりません。しかも、何を教えて(語って)いるかではなく、何を教えていないか(語っていないか)を見分けなければなりません。キリスト教の教えの中心は何でしょうか。福音の中心は何でしょうか。それはパウロがローマ書 1 章で語っているように、「御子」に関することです。つまり、キリスト教の中心は「イエス・キリスト」(イエシュア・ハマシアッフ)なのです。

●御父のふところにおられた御子イエシュアだけが、本当の神をあかしすることができます。御子は神でありながら、私たち人間と同じ姿をとってこの世に來られました。そして私たちに代わって十字架において罪とその呪いを引き受けて下さり、死なれました。しかし三日後、死を打ち破ってよみがえられ、天に昇り、そこからご自身の霊である御霊をこの世に遣わし、信じる私たちのうちに住まわせてくださいました。その御霊によって、キリストによる救いと解放が実現したのです。ですから、私たちにとってこのキリストとのかかわりが一番重要なのです。

●パウロはいつも「キリストにあって」とか、「キリストのうちに」とか、「キリストによって」、「キリストを通して」といった言い方をしています。なぜなら、パウロにとってキリストなしということはありませんからです。私たちはどうでしょうか。あなたにとって、キリストはあなたの王でしょうか。中心でしょうか。なぜこんな質問をするのかと言えば、キリスト教と言っても、キリストがなくても済んでしまうような偽キリスト者がいるからです。キリスト教の異端はすべてこのキリストがその中心から外されています。パウロはキリストとともに、キリストにあって、キリストを通して、キリストのために生きたのです。これが聖書の教える正しい、生きた信仰なのです。

【新改訳改訂第3版】ガラテヤ書 2章 20節

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によって生きているのです。

●キリストを中心に置かない教えを教える者はみな偽者です。これを私たちは見抜かなければなりません。今も生きておられるキリストとの正しいかわりなしに、神への信仰はあり得ないからです。もし私たちがキリストとのかわりなしから外れるならば、私たちの信仰は律法的なものに墮してしまうのです。パウロはローマ書 1章 16節でいみじくもこう言っています。「そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。」と。

●外面的にいかにもすばらしい言葉、行い、熱心さがあっても、その人の中にイエス・キリストこそ自分の主であり、また王であることを認め、あかしし、仕えることがなければ、偽者であると警告しています。キリストこそ私たちと神との唯一の仲介者であり、その方なしには私たちは失われた者です。キリストこそ私たちの神であり、救いであり、いやし、力、望み、いのち、喜び、勝利とならなければなりません。キリストこそまさに神の福音の中心だからです。

## 2. 善にはさとく、悪にはうとくあれ

●パウロは次にローマ教会の従順な、純朴な信者に対しての勧めを述べています。ローマ教会の人々の特徴は、「純朴な人たち」とあるように「信仰の従順」にありました。ただ純粹で誠実な信仰を持ってはいても、経験に乏しい信者でした。ですから、パウロは彼らに「善にはさとく、悪にはうとくあってほしい」と述べているのです。イエシュアもこれと似たようなことを言われました。それは弟子たちをこの世に遣わされる時です。「いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。」(マタイ 10:16)と。

●普通、蛇というと、何か裏で悪巧みや策略をもって、何をするかわからない、信用できないというイメージ

ージがありますが、イエシュアがここで「蛇のようにさとく」と言っているのは、蛇の悪い面ではなく、良い面、すなわち物事の真相を見抜く力を持つことを意味しています。「蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい」という意味は、人に対しては蛇のように用心し、神に対しては「鳩のようにすなおに従いなさい、信頼しなさい」ということです。決して逆になってはいけません。パウロも「善にはさとく」と言っていますが、「善」とは神のみこころのことです。「善にはさとくあれ」と言われても、現実はその簡単なことではありません。なぜなら、「善にさとくあれ」ということは、ただ神を恐れて、人を恐れないということだからです。ところが私たちの多くは、神を恐れるよりも、人を恐れてしまう者なのです。

●今回の北海道リバイバル・ミッションにおいても、参加したくても参加できない教会があったようです。その原因は、人を恐れたからです。使徒ペテロもパウロから、「福音の真理に立たないで人を恐れた行動を取ったことに対して、面と向かって抗議されました(ガラテヤ 2:11~14)。使徒の働き 10 章に記されているように、神はペテロに、ユダヤ人だけでなく異邦人も愛して受け入れておられるということを教えるために、特別な取り扱いをされました。ペテロはその取扱いによって、異邦人に対する偏見を取り除くことができました。異邦人と一緒に食事をするほどになっていました。ところが、エルサレムから割礼を受けたユダヤ人がやってくると、割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行ったのです。それは正しくないと知りながら、人を恐れ、本心を偽った行動を取ったのでした。

●このペテロの態度を私たちは責めることができるでしょうか。人を恐れるのは人間の弱さです。「善」は神のみこころであり、真理そのものです。しかし私たちは神を恐れる者となりましょう。「主を恐れることは知恵の初めである。」(箴言 1:7)とあります。主を恐れることによって上からの知恵をいただくことができるのです。そのことによって、「平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださるので(ローマ 16:20)。

### 3. 頌栄

●最後に、25~27 節を見てみましょう。パウロは神を賛美してこの手紙を締め括っています。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 16 章 25~27 節

25 26 私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、  
今や現されて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に  
知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、  
27 知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。

**(1) 主なる神のみが私たちが堅く立たせ、信仰の従順に導くことができる方として賛美しています。**

●第一に、私たちは主の恵みに堅く立っているでしょうか。そして信仰の従順に導かれているでしょうか。

主の恵みと愛だけが、私たちの傷ついた、かたくなな心を造り変えることができます。主の霊によって、私たちは律法的な生き方から解放され、強制ではなく、むしろ自発的に喜んで主に仕える者とさせられます。「私たちは私たちが愛してくださる方によって、圧倒的な勝利者となるのです。患難も、苦しみも、迫害も、危険も剣も、何ものも、私たちがキリストの愛から引き離すことはできません。」

### **(2) 主なる神のみが知恵に富む唯一の神であることを賛美しています**

●ローマ書 9～11 章には、イスラエルの歴史における隠された神の知恵を知ることができます。一見、イスラエルの民は見捨てられたように見えます。しかしそうではありません。神がご自身の民イスラエルをさばかれたのは、福音が異邦人である私たちにおよぶためでした。やがて神はユダヤ人にも栄光に満ちた未来があることを教えています。ですから、パウロは「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう」とたたえています。「神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださる」と聖書は宣言しています(ローマ 8:28)。

### **(3) 主なる神のみが栄光を受けるべきことを賛美しています**

●ローマ書 12 章以降では、私たちはキリストのからだなる教会の奥義について学びました。教会のかしらはキリストです。主は教会を通してご自身を啓示することを願っておられます。かしらとからだ。この関係を正しく知ることが重要です。からだのないかしらは存在しません。逆に、かしらのないからだも存在しません。いずれも密接な関係にあります。ですから、私たちは何をすることも主の御名によって集い、主の御名によって人々を祝福し、祈り、愛し、仕え、礼拝し、共に協力して主のわざに参与して行く必要があります。なぜなら、主にある一致を通して、主ご自身が栄光をお受けになるからです。

1995.8.20